

生存科学研究ニュース

Vol. 36, No.4

2022.1 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

2022年 新年にあたって

理事長 青木 清



1941年の12月8日は日本と米
国合衆国間での戦争が勃発し
た日で80年経過したこと
から日本の報道機関が
大きく取り上げていま
す。第二次大戦の終戦
を迎えたのがその4年
後の1945年8月15日
でした。

20世紀において人類は人間の尊厳を理解するために第一次大戦と第二次大戦において人間の尊厳の剥奪を体験したのです。日本は第二次大戦において、広島市と長崎市で原子爆弾による攻撃を受けました。これによってそれまで人類が経験したことのない多くの人命が奪われる体験をしたのでした。それは、科学である核物理学の進歩によって生まれた原子爆弾によるものでした。これは人間の生存を守ることでなく破壊するもので、地球全体にとっても悪いことでした。第二次世界大戦が終了した後も世界の大国は原子爆弾を製造保持することを競う状態です。人間の尊厳を忘れていたかのようなのです。このことは「米国の原子爆弾の父」といわれるオッペンハイマー博士(核物理学者)が述べるように「核物理学者は罪を知った」ことに象徴されることです。

生命倫理の課題は核兵器だけでなく、今日の生命科学において進展している生命の基本であるDNAの組換えDNA操作についてです。

地球上の生命ある生物は生物の個体維持と種属維持を共通の特徴としています。これらの生命情報を担っているのはDNAです。DNAは化学物質ですからDNAを仲立ちにすることで物質世界と生命世界がつながったのです。

組換えDNA操作は分子生物学としてアメリカで生まれた技術です。この技術の進展によって人間生命の生命現象を根本的なところから操作して調べることが可能となり、これにより大きな倫理的問題を引き起こす可能性を秘めています。

それはヒトの生命現象について分子レベルから自然科学的に理解できるとともに技術化されて、人間の欲望を満たすための生命操作の可能性が大となったからです。例えば、現在、政治的にも話題になっている体外受精における卵子、精子の選別や胎児の選別などです。さらに深刻な問題は、病原菌の分子レベルでの操作によって、人類にとっての生物兵器となる病原菌の作成です。それは1970年代の前半からアメリカ合衆国の軍隊は原子力による兵器に代わって、生物兵器の作成を論じていたからです。この生物兵器の問題は、この度のコロナ禍による世界的な混乱がコロナウイルスの人工的操作がもたらした結果ではないかと疑われたことでも明らかです。

今回の新型コロナウイルスによって生じた、この2年間の問題は、我々人間にとって極めて貴重な体験であって、これを単なる被害意識にとどめるだけでなく、人間社会にとっての大変な事件であったと強く認識して、生存科学研究所の創立者である故武見太郎先生が理念として唱えた人間の生存を守るための「生存之理法」を想起して、再度経験しないためにも、この体験を次世代の人類のために役立てるべく生命倫理として、未来への課題として次世代に継承することを期待する次第です。

このようなコロナ禍によってもたらされた社会状況に対して生存科学研究所は公益財団法人として、理事によって企画された令和3年度のシンポジウム「コロナ禍 医療・ケア現場の語り」を1月30日(日)にWebによって開催する所存です。ぜひ会員の皆様のご参加を期待しています。

第9回市民公開講座開催報告

本田 美和子

去る2021年9月25日(土)13:00-16:00に、生存科学研究所共催の第9回市民公開講座を国立病院機構・東京医療センターからオンライン配信にて開催いたしました。今回のテーマは「つなげようケアのバトン」。ユマニチュードでつながる社会について語り合いました。今、ユマニチュードは医療や介護の現場、家族をケアする市民の方々へ広がりつつありますが、医療や介護の現場、施設、ご家族それぞれが個々のレベルで行っているユマニチュードが繋がっていかないという課題があります。ユマニチュードのケアのバトンがどこかで落ちてしまうこと、今日届けたケアが明日は届かないということは、何よりもケアを受ける当事者の方々にとって辛いことでもあります。

どうしたらケアのバトンを繋げていけるかを共に考えることを今回の市民講座と日本ユマニチュード学会総会のテーマといたしました。生存科学研究所の青木清理事長に開会のご挨拶を賜ることから始まった今年の市民公開講座は、ユマニチュード考案者のイヴ・ジネスト先生による基調講演「家族のためのユマニチュード」と、家族介護の経験をお持ちの方々による鼎談の二つのプログラムで構成し、鼎談は、家族介護の当事者である南高まり様(認知症専門医・長谷川スケール開発者の故・長谷川和夫先生のご長女)をゲストに迎え、日本ユマニチュード学会の阿川佐和子理事、本田美和子代表理事の三人で行いました。

生活に援助を必要とする方を自宅で支える家族介護者の方々には、職業的にケアを行う専門職とは異なる困難があります。専門職は勤務時間が終われば、ケアから離れる時間を取ることができますが、家族を介護しているの方々には、それがありません。24時間365日、常にケアを提供することを自分に課して、献身的にケアを行っている方々がたくさんいらっしゃいます。今年の市民公開講座では、そのようなご家族に焦点を当て、介護を受ける人と介護をする人の双方が良い時間を共に過ごし、良い関係を作ることと穏やかな生活が実現することを語り合い、お伝えすることを目的といたしました。

イヴ・ジネスト先生は、ご両親の介護をなさった家族介護経験者でもあります。家族の介護をするときに大切なことは、認知症の特徴を知ることであり、

記憶がどのような仕組みで人の暮らしに不可欠なものとなっているかをわかりやすくお話してくださいました。認知症の行動心理症状と呼ばれる状態は、ご本人が感じる不安が引き金になることが知られています。「ここにいっても大丈夫」「この人というから安心できる」とご本人に感じてもらうことが、認知症行動心理症状の予防と、それが起きてしまったときの対応としてとても大切です。相手に安心してもらうためのコミュニケーションとしてユマニチュードの技術は有効であり、その技術を活かすためには基本的な考え方を知っておくことが重要であることについての映像を用いた講演は、多くの方々を勇気付けるものとなりました。(写真1)



写真1:イヴ・ジネスト先生と通訳の高野勢子氏

後半の鼎談は、家族介護者として南高まり様にご登壇いただきました。認知症治療の第一人者として世界の認知症研究を牽引し、ご考案になった「長谷川式認知症スケール」は現在も臨床現場で日常的に利用されている医師の長谷川和夫先生は、晩年ご自身が認知症であることを公表になりました。「認知症を抱えながら生きていくことは不幸ではない。周りのサポートがあれば楽しくやっていくこともできる。」とお話しになり、長女の南高まり様はまさにそのサポートを続けた方です。お父さまのゆっくりとした変化と、仕事や生活で生じた出来事、お父さまとご家族がそれらをどのように解決していったか、ということなどについて数々のご経験をお話してくださいました。

聞き手は、日本ユマニチュード学会の阿川佐和子理事でした。阿川理事はお母さまの介護をきっかけに介護についての小説をお書きになることになったとき、ユマニチュードに興味を寄せてくださり、以降数々のお力添えをくださっています。お母さまの介護が始まったとき、周りの方々から「がんばりすぎないこと」「周囲の力を借りること」と応援が得られたことを話してくださいました。

お二人の対話の広がり、介護は困難に直面する

一方で、その解決策はかならずあり、関わる方々のそれぞれの人生の楽しみをより深めるきっかけになることを示してくださいました。300人を超えるオンラインの視聴者からは、たくさんの感想が寄せられました。(写真2)



写真2:左から 阿川理事・南高様・本田代表理事

今年もまたこのような意義深い市民公開講座になりましたのも、生存科学研究所からいただいた援助の賜物です。心より御礼を申し上げます。

「森とレジリエンス ～地域の再生～」研究会の報告
研究責任者 清水 美香

「森とレジリエンス ～地域の再生～」研究会は、森・地域・人の関係性に意識を向け、森・人・地域に又はその「あいだ」に内在する「レジリエンス」に着目し、それを軸に地域の再生に関わるエッセンスを協働知(様々な知の総体として協働によって引き出される知)として集約し、伝えることに主眼を置く。本研究を通して、森・人・地域の関係性を見直し、その中にある分断を紡ぎ直す視点を引き出し、地域再生への示唆を引き出すことを目指す。コロナ禍の影響で、しばらくオンラインで進めてきたが、ようやく2021年10月18日(月)-19日(火)に、各地に散らばるメンバーが6名京都に集まり、対面で研究会を実施することが可能になった。その研究会は上記研究目的を果たすための研究活動の一環で2日間の日程で行われ、1日目は協働ワーク(会場：京都大学吉田泉殿)、2日目は森のフィールドワーク(フィールド地：京都大学上賀茂試験地)を実施した。

これまでに各研究メンバーがそれぞれコミットしてきた地域での活動を踏まえて「森とレジリエンス～地域の再生～」をテーマにエッセイを持ち寄り、「森とレジリエンス～地域の再生を思考し創り出すための、異なる音の交差～」と題するエッセイ集を製作してきた。

1日目の協働ワークではそのエッセイ集から各エ

ッセイを紐解き、各執筆者がそれぞれのエッセイの読者役に回り、各エッセイの細かな表現まで深く読み込んだ上で、各箇所から想起したこと、あらためて確認したこと、そこから生まれる疑問等をカードに書き込み、何十枚ものカードを作成してテーブルに広げて共有・閲覧し、それに基づいて異分野・異業種のメンバー間で対話を行った。(写真1)

2日目は、参加メンバー全員で森の中を共に歩き、森と里との繋がりを体感しながら、1日目の対話をさらに深めることになった。(写真2)



写真1:1日目の協働ワーク中の対話の様子



写真2:フィールドワーク中に出会った炭焼き窯

そもそも本研究会には、異なる(自然科学・社会科学・人文学・環境デザイン学・文化人類学・心理学など)専門・背景の研究者または実践者がメンバーとして連なる。このことは、レジリエンスを生み出すには自然・人間・社会の「関係性」が鍵を握るといふレジリエンス研究の基礎と関係している。つまりその「関係性」を見通すには、異なる専門・背景の関係者が協働することが前提となる。しかしその協働は決して容易なものではない。異なる専門・背景を持つ者同士の間では、使う言葉や表現が意図するようには伝わらないことがある。目に見える壁も見えない壁も存在する。レジリエンスは、長年心理学・生態学・社会学・工学など、多様な学問で取り上げられてきたが、レジリエンスについて学問間を俯瞰して見ることを通して、持続可能な社会に活かすという動きがでてきたのはつい近年のことである。

これは学問的には transdisciplinary(超学際的)研究と関係するのであるが、そこには学問領域のみならず、学問間以外の各現場も含めた域を超える必要がある。しかし、このことが実践されている研究はまだ数少ない現状がある。この研究会は、そこにも挑戦している。このため異なる学問分野や背景にある者同士の間において、お互いの思い込みや齟齬ということも生じやすい。だからこそ、お互いの書いたものを深く読み込んだり、対話によって言葉や表現の確認をする必要がある。一方異なるからこそ、異なる相手の書くものから、新しい気づきがあったり、自分の理解を異なる視点から再認識することもある。

そうしたことが、今回の協働ワークでも顕在化し、また実践されていった。協働ワークの中のカード創りは、メンバーの一人がこれまでの異なる者同士の対話の経験を活かして発案してくれた新しい試みであったが、このカードづくりを通してお互いのエッセーを深く読みあい、一人一人が各エッセーの中で気になった箇所を取り上げ、そこにコメントを付けていくという丁寧な作業によって、メンバー間の相互理解を促進することができた。例えば、私の書いたエッセーの中に『「レジリエンス・・・(中略)・・・再生力。(中略)・・・しなやかさ・・・(中略)・・・多様なものを吸収しながら、異なる道を見出し、学びながら上昇してく力。“Power”ではなく“Capacity”。Capacity をもっているかどうかは、・・・(中略)・・・吸収性、柔軟性が必要条件になる』と書いた箇所がある。それに対して、メンバーの一人は、カードに『レジリエンスの背後に「野生の思考」?』というタイトルを付けて、『答えや意味は一つではなく、環境全体の諸要素の在り方や変化によって、多様に存在する。そうした縁起や相待を可能にする吸収性・柔軟性は、伝統的には「野生の思考」的な経験や観察などの認知の深まりに比例してその「器」を調整するかも知れない』としてコメントを書き添えた。そこから分野の違いを超えたレジリエンスへの対話が深まっていった。

こうした協働ワークに加え、森のフィールドワークにおいて異なる者同士が1つの森の中で同じ時を共有することによって、少しずつお互いの意識のズレや齟齬が調和へと向かい、またそれぞれの考えや見方が相乗することによって、学び合い、気づきあいへのプロセスが創られていくという実感を得ることができた。このプロセスを通してこそ、本研究会がこれから目指す、メンバー全員執筆による「森と

レジリエンス ～地域の再生～」の書籍化という形の方へと向かうことができるだろう。

第8回生存科学シンポジウムのご案内

テーマ:「コロナ禍 医療・ケア現場の語り」

日時: 2022年1月30日(日) 13:00-16:00

参加費: 無料(どなたでも参加できます)

オンライン: 定員300名・先着順

プログラム:

- 13:00-13:10 開会の挨拶とシンポジウムの趣旨説明
生存科学研究所理事長(上智大学名誉教授) 青木 清
- 13:10-13:40 救急災害医療の立場から
神奈川県済生会横浜市東部病院 副院長 山崎 元靖
- 13:40-14:10 高齢者介護施設の立場から
介護老人保健施設ハートケア横浜介護看護部長 高柳 克江
- 14:10-14:40 在宅医療の立場から
医療法人社団悠翔会理事長・診療部長 佐々木 淳
- 14:40-15:10 患者の立場から
株式会社ラヴアンドシェアイメージ代表取締役 永山 新一
- 15:10-15:20 休憩
- 15:20-15:55 パネルディスカッション
- 15:55-16:00 閉会の挨拶
生存科学研究所副理事長(東京大学名誉教授) 松下 正明
司会:生存科学研究所専務理事(東海大学医学部教授) 竹下 啓

申し込みフォーム:



定員300名・先着順
https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_bmjSAA--R2KyJ4I5o4z4nw

研究会等日報

- 11月25日(木) 介護現場をIT技術で効率化するための調査・開発研究会
- 11月26日(金) みらいエンパワメントカフェ第2回ワークショップ2021
- 12月1日(水) 資本主義の教養学講演会
- 12月6日(月) 健康価値創造研究会
- 12月9日(木) 第8回生存科学シンポジウムオンライン開催(2022.1.30)のお知らせをホームページに掲載
- 12月9日(木) 医療・福祉・教育におけるサービス利用者側のモラル意識と葛藤の実際研究会
- 12月10日(金) 「森とレジリエンス～地域の再生～」研究会公開イベント